

東讃地域における耕畜連携の推進

■ 管内畜産農家・耕種農家・コントラクター組織 ■

(東讃農業改良普及センター ○田頭梨華 集落営農・農畜産経営担当)

●対象の概要

東讃地域では畜産業が盛んで飼料作物の生産も多く、令和4年度における県全体の作付面積に占める割合は、WCS用稲が83%、飼料用トウモロコシが91%、牧草が67%を占めている。こうした中、輸入飼料価格が高騰・高止まりし、大規模農場を中心に経営が圧迫されてきたことから、飼料作物の増産が求められている。

一方、耕種農家においては、主食用米価格の低迷から、経営品目の中心を水稻から麦にシフトすることで経営改善を図ってきたが、近年の肥料をはじめとする各種資材の価格高騰により、所得確保に向けて新たな経営品目を模索している状況である。

こうした中、高松市香南町でT法人が、令和4年に新たにコントラクター組織を立ち上げ、地域の飼料作物の収穫・調製作業に取り組んでいる。

●課題を取り上げた理由

畜産農家と耕種農家の課題を解決するため、耕畜連携による飼料作物の作付け推進が有効であり、畜産農家と耕種農家のニーズに沿ったマッチングに取り組む必要があると考えられた。しかしながら、実際に進めていく上で、畜産農家が必要とする飼料作物の種類や数量など具体的なニーズと、耕種農家が飼料作物を生産するための条件や価格などに関する情報が十分把握できていなかった。

また、高松市香南地区では、これまで県外のコントラクター組織に収穫作業を委託していたが、収穫日程の調整や委託費用の増加などにより作付拡大が難しくなってきた。そこで、地域内でコントラクター組織を新たに立ち上げたが、持続可能な組織として活動していくためには、作業に必要な人員や作業時間、収穫量などを踏まえた適正な作業料金の設定などを行う必要があった。

●普及活動の経過

1 ニーズに沿ったマッチング

令和4年10月～12月に、耕畜連携に取り組んでいる畜産農家17経営体を対象に、聞き取り調査を実施した。調査結果を当普及センターの集落営農・農産経営担当と共有し、集落営農組織の定例会や個別巡回の機会を利用して耕種農家に調査結果を提示するとともに、WCS用稲を中心とした飼料作物の導入について提案するなど作付け推進を行った。

2 コントラクター組織の育成支援

1) 令和5年度作付け計画の作成

高松市香南町の酪農家から、WCS用稲より栄養価が高い飼料用トウモロコシを多く生産してほしいとの要望があった。このため、飼料用トウモロコシに重点をおいた作付け計画を香南地域WCS生産組合と調整し、作成した。(表-1)

表-1 令和5年度作付け計画

飼料名	面積 (ha)	前年度比	収量 (ロール)	前年度比
WCS用稲 (早期コシ)	1.4	61.4%	112	58.0%
WCS用稲 (短期コシ)	15.5	128.5%	1,080	116.0%
WCS用稲 (専用品種)	8.1	83.3%	759	69.5%
(WCS用稲計)	25.0	103.8%	1,951	88.0%
飼料用トウモロコシ	17.0	165.4%	1,131	177.3%

2) 「収穫プラン」の作成

前年度まで県外のコントラクター組織に収穫作業を委託しており、T法人が行う収穫は令和5年度が初めてであったため、播種や定植予定日から収穫日を予測した「収穫プラン」を作成し、人員の確保や速やかな運搬など円滑に作業が行えるよう提案した。

3) T法人の経営収支を試算

令和5年度の収穫作業料金を決定するために、T法人の経営をシミュレーションし、

作業料金の試算を行った。

●普及活動の成果

1 飼料作物の新規作付け面積の拡大

17経営体から聞き取り調査を行い、今後更に利用を希望する飼料作物を取りまとめた結果、WCS用稲は112.1ha、飼料用トウモロコシは19.7ha、牧草は7.4haとなり、飼料用米（SGS：ソフトグレインサイレージ）は飼料会社を経営する畜産農家から「どれだけあっても良い」という回答があった。

これらの要望を基に耕種農家とマッチングした結果、WCS用稲が41.6ha、飼料用トウモロコシが24.7ha、牧草が31.7ha、飼料用米（SGS）が38.7haとなり、飼料作物の新規作付け面積は、136.7ha増加した。（図-1）

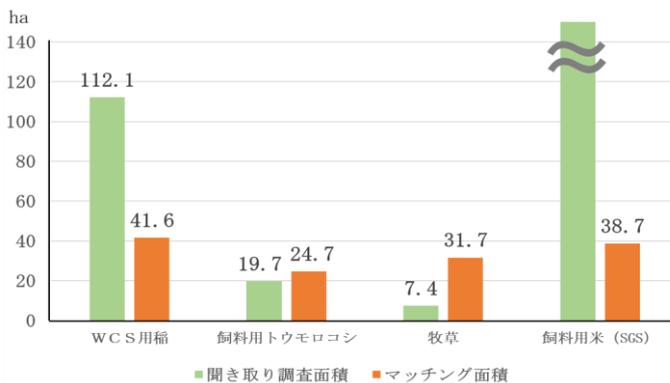


図-1 聞き取り調査結果とマッチング面積

2 コントラクター組織の育成支援

1) 作付け計画に対する実績

早期コシヒカリ等の水稻及び飼料用トウモロコシの反収は、いずれも昨年度より減少した。特に飼料用トウモロコシについては、4月下旬～5月上旬の断続的な降雨により、作付適期に播種ができなかったほ場や出芽不良となったほ場があったため、平均収穫量が3ロール/10aとなり、昨年と比較して2.5ロール減少した。

2) 「収穫プラン」に対する実績

早期コシヒカリに関しては、概ね計画どおりの収穫ができた。しかし、専用品種については、降雨等の気象の影響により、当初の予想より適期が遅くなってしまった。また、飼料用トウモロコシについては、作付計画より面積が減少したため収穫日数は計画の1/3以下となった。短期コシヒカリについては降雨の影響により収穫開始日が7日遅れたため、生育ステージが糊熟期となり、品質への影響

が懸念される結果となるなど、検討課題も見つかった。

3) 作業料金の決定

品目ごとに収穫作業や梱包作業に要する人員や労働時間を調査するとともに、播種作業や除草作業に係る経費や燃料費、減価償却費等を考慮し、適正な作業料金を試算した結果、収穫作業を委託していた県外のコントラクター組織の作業料金と同額にすることで、所得が約300万円確保されることが確認できた。



汎用収穫機による飼料用トウモロコシの収穫

●今後の普及活動の課題

1 持続可能な耕畜連携の推進

マッチングについては、今後も畜産農家と耕種農家のニーズを把握しながら進めていく必要がある。

また、今後輸入飼料価格が低下した場合でも、現在のような価格高騰に備え、耕畜連携の取組みが継続されるように、耕種農家と畜産農家、コントラクター組織の3者が納得のいく作業料金や体系を継続的に検討していく必要がある。

2 コントラクター組織の育成支援

播種時の降雨や7月～8月の高温により、播種ができなかったほ場や収穫を断念したほ場があった。今後は、畜産クラスター事業で導入したサブソイラー等を活用し、排水対策の徹底を図るなど、収量増加に向けた栽培指導が必要である。また、想定より遅い収穫適期となったWCS用稲もあったので、今後は農産担当と連携して出穂調査を行うなどの確な収穫指導を行う必要がある。

また、T法人におけるコントラクター組織の導入事例をケーススタディとして、他地域における新たなコントラクター組織の育成を支援し、更なる耕畜連携の取組み面積の拡大につなげる。